馬耳東風

どうやら人の世に権力闘争は付き物だが，日本史年表によると平安末期藤氏長者の左大臣藤原頼長は，宋の商人・劉文冲から「五代史記」や「唐書」などの史書を贈られたので，その返礼に砂金を，さらに法皇に奥州の砂金165両を献上したとある．その頃，兄の関白忠通は鳥羽上皇に頼長の異心を奏上した．やがて皇室内部で崇徳上皇と後白河天皇が，摂関家では藤原頼長と忠通との対立が激化し，平清盛・源義朝らを巻き込んで「保元の乱」が起こった．忠通側は崇徳上皇を白河殿に襲い藤原頼長は傷ついて敗れ奈良で没した．この内乱で皇室・摂関家の内紛に武士が活躍し，武士の政界進出を促すことになった．頼長の日記「台記」によると，藤原家守護神の春日大社へ名刀「金地螺鈿毛抜形太刀」を奉献したと考えられている．毛抜形は拵の柄に大きな透かしが空いており，それが古代の毛抜きに似ていることに由来するといわれる．時代を経て黄金の輝きを保ち続け，昭和5年に国宝に指定され神前から取り下げられ文化財として収蔵庫に保存されてきたが，第60次式年造替本殿遷座の折，現代技法で復元新調して神前にお返しする取り組みが行われた．復元の模様がNHKで放映され注目された．太刀は抜けず，CTスキャンで分析すると1キログラムもの高純度の金が使われていた．沃懸地，すなわち金粉を沃ぎかける地の太刀の鞘に螺鈿技法で表現された「竹林で雀を追う猫」は竹林や猫の斑点には青いガラス，猫や雀の目には琥珀が使用されている．何匹かの猫の表情は明るく，首輪も付けられ竹林で雀と戯れる世界だ．極致の芸術に刻まれた権力者の願いが，衛府武官が用いる黄金の太刀を通して奉納され，そこに斑猫が描かれた事実は，平安の癒しの浄土世界に触れ，現代人の心理に共通する思いである．春日大社は神護景雲2年（768）に創建され4柱の神が祭られているが，第2殿の経津主命は神話によると天孫降臨に先立ち，第1殿の武甕槌命と共に葦原の中つ国を平定し，大己貴命を説得してその国を皇孫瓊瓊杵尊に譲らせたとされる刀剣の神である．大社は復元新調して神の元へお返しすることを悲願としてきたが，今回の遷宮に際し厳粛な内に願いがかなった．現代の名工5人の手で3年がかりで製作されたこの刀剣は，千年の時を経て，まばゆい宝剣としてよみがえった．科学の力を借り平安を祈る復元技術の結晶に感銘し，敬意と感謝のうちに神の懐にお返しし，熱い思いを引き継ぎ再び目に触れることはない．猫は公式にキャラクター化され人気者だ．

また，ほぼ同じ頃に国宝「信貴山縁起絵巻」が描かれた．「尼公の巻」に彼女が民家を訪れた際のありのままの民衆生活が描かれ，首布を付けた黒白で鼻先が黒い猫が上がり端に居座るのと，窓下に2匹の犬が来て首輪をした黒い犬を家人の男性が窓から棒で追い払うような動作と，茶色の犬が訪ね人を吠える漫画的な線が見えるが，尾は挙がって自然な共感を誘う絵である．どうやら，この猫の絵は絵画史料で最古だという．神仏に犬や猫が関わり，人の心に安寧の共感を形作っていることに古代人の魂を見た思いだ．（柏）